

編集室から

毎年、ゴールデンウィークが近づくと、石川県七尾市の旧市街地は、活気づいていきます。5月3～5日に青柏祭（せいはいくさい）が開催されるからです。高さ10数メートルという巨大な山車（デカ山。ユネスコ・国無形文化財）が3基、出し曳かれるのですが、それぞれのデカ山に、舞台が設えられ、歌舞伎の演目のワンシーンが、着飾った人形で表現されます。

デカ山が運行されるとこれらの人形は、高い舞台上に上げられて、見物しにくくなります。そこで、その前夜、市内の各所で整えられた人形を間近にみられるよう飾って見せる「人形見」が催されます。この人形見の場所は人形宿と呼ばれますが、人形宿となることは大変名誉なことで、旧市街の方にとっては、一生に一度と夢見るそうです。人形宿になれるのは、嫁入り・婿取り・新築など慶事のあったお宅が基本的に選ばれますが、一晩で百万円単位を掛けて豪華に飾るお宅もあったとか。お宅の前では、見物客に樽酒が振る舞われたり、親戚縁者・友人を招いての大宴会がされることもあります。

3基のデカ山に3体ずつ、歌舞伎人形が出されるので、のこのような人形宿は、毎年9軒必要になります。ところが、その一夜の警沢が逆に負担となり、近年はほぼ、公的施設での設置、人形見となってきています。今月の表紙写真は、昨年の人形宿の一つ、花嫁のれん館のもので、奥の人形がデカ山に乗るもので、手前の「光る君へ」と題された貴婦人は、生け花によるものです。

能登半島地震が発生した一昨年は、デカ山が通る道路が損傷し、開催されませんでした。行政の一早い対応で、運行ルートとなる道路が先行して修復され、昨年から復活しています。今年も、夕焼け空を眺め樽酒を呼ばれながら、人形宿めぐりに出かけます。（は）



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2026/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

泉 月



青柏祭人形見
石川県七尾市にて
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

引き続き、薬剤師の話です。調剤薬局やドラッグストアは、大手資本の寡占状態になっています。そのため薬剤師の移動が頻繁になり、患者さんと信頼関係を築く前にいなくなってしまうという事態になっています。

◎ 薬剤師と信頼関係を築くことは、セルフメディケーションだけでなく医療分業の面でも重要です。複数の医療機関に受診している場合、以前は各々の医師から受けた処方を経合的にチエックする方法がありませんでした。その結果、似たような薬が重複していたり併用してはいけない薬を知らずに内服してしまったりしていました。これを防ぐには、かかりつけの薬局を作って全ての処方箋を集約して管理する必要があります。そのために行われたのが医療分業です。医師は処方箋を出すだけにして、実際に薬剤を患者さんに手渡す薬剤師をゲートキーパーにするシステムです。

◎ しかし、現実はどうでしょうか。残念ながら、かかりつけ薬局は普及していません。医師の処方箋は、その大多数が医療機関の前にある薬局（これを門前薬局と呼んでいます）で薬に換えられているのが現状です。理由は色々あります。処方箋の有効期限は四日しかないのです、患者さんにすれば貰ったらすぐ薬に換えたいくなるのは仕

濱の起業塾 八十五 『地域経営の視点』

地域の外の財と、内の財との収支を域際収支という。域外財が地域に流入することは、域際収支の黒字要因である。逆に、地域内の財が流出すると、赤字要因となる。何が黒字要因・赤字要因となるかは、細かく検討すると、きりが無い。学問的に多少問題があっても、実際に大きく見誤りがなければ、それで善しとすることを了承願いたい。

黒字要因の一つに、地域（自治体）外の職場に働きに出で、給与を地域内にもたらす行為がある。近隣に比較的規模の大きい製造業や企業が立地している場合、そこで働く人の中には、立地自治体周辺地域から通う人も少なくないだろう。このような自治体を跨いで職場と住居を持つ住民が多い自治体の経済は、ベッドタウン経済となる。

ベッドタウン経済圏の自治体では、暮らしてやすき子育てのしやすさを全面に出す住民福祉的政策が採られることが多いと思う。これはこれで誤りではないが、問題は、長期的視点で見たとき、いつまでベッドタウン経済が維持できるのか、である。現在の

方ないかもしれない。薬剤師の側も、薬の名前と量を処方箋で指示されるだけなので、病名や治療の効果は判らないため曖昧な説明をするしかありません。

◎ もし処方箋の中で薬の用量や併用に問題があった場合、薬剤師は速やかに処方した医師へ連絡しなければなりません。これを疑義紹介と言います。診療時間内の医師に電話をかけて、その日に出した何十枚かの処方箋の一枚について疑問を口にするわけです。旧知の間柄ならともかく、よく知らない医師が相手の場合は相当なストレスでしょう。逆に医師の立場からすると、それなりの理由があって薬の用量を少なめにしたたり併用注意（併用禁忌と違って併用は可能です）を敢えて使ったりしているのに、忙しい最中に電話をされるとウンザリしてしまいます。この解決策も、薬剤師との信頼関係しかありません。

◎ マイナンバーカードは過去の処方歴が判るといふ触れ込みで期待していましたが、現実には1〜2ヶ月もタイムラグがあります。システム上の問題だそうです。今どき、お粗末と言われても仕方ありません。



【プロフィール】

（い）がき としお（金沢大学北浜寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クマクマしています。



就労者は、年月とともに高齢化する。現在の四〜五十台は、十年後五〜六十台となる。就労者が引退し、年金暮らしとなる未来、新しい就労世帯層が地域内に生まれていなければ、域外就労を通じて地域が得られていた外貨は、縮小する。つまり、地域のベッドタウン経済は徐々に崩壊を始める。

ベッドタウン経済真つ盛りの時代は、好調だが、域外就労者数の減少とともに、真綿で締められるように地域経済は疲弊していく。このような状況に陥ってしまうと、地域再生へとソフトチェンジがしにくいだけでなく、その必要性に気づくのも遅れがちになる。今、ベッドタウン経済となっている地域は、十〜二十年というスパンの静かな時限爆弾を抱えているとも考えられはしまいか。

地域を経営する視点は、短期的な話ばかりではなく、長期的な視点も欠かせない。四年に一度、地域経営とは切り離された考え方で、地域が振の回されている場合ではない。我が国の高齢化は、待った無しの状況にある。

前回、生成AIの活用について、「(1)効率化・自動化」「(2)高度化・付加価値化」「(3)構造的変革」の3段階を提示した1。その後、もう一つ先に「(4)共創常態化」があるのではないかと考えるに至った。今回はこの、生成AI活用の4段階について考えを巡らせてみたい。

(1)効率化・自動化 (Efficiency)

定型的な人間の思考の一部や記述作業を代替する段階である。人間が作業指示を行い、AIが定型工程の代替装置 (Automator) となる。時間圧縮、品質安定化が活用による主な効果だが、これらに加えて認知負荷軽減も大きい。節約された思考エネルギーの分を、より重要な考えるべきことに振り向けることが、一層効果的な活用のポイントとなろう。

(2)高度化・付加価値化 (Augmentation, Added value)

人間の思考を量的に拡大し、質的に高度化させ、その結果として知的成果の付加価値を向上させる段階である。人間は管理者・編集者となり、AIを発想の加速装置 (Accelerator) として活用する。視点の多様化、試行回数の増加、MECE2な仮説生成の高速化などが実現する。発想の幅が広がり、人間はそこから方向性を選択することが重要な仕事となる。

(3)構造的変革 (Transformation)

人間の思考方法および知的生産プロセスそのものを再設計させ、構造変革を促す段階である。設計者である人間が、統合補助装置 (Integrator) としてAIを活用する。情報の統合、多分野の接続に加え、試行プロセスの再設計が促され、知的労働の中身が変わる。依然として設計責任は人間にあり、問いの設計力がますます問われるようになる。

(4)共創常態化 (Co-evolution)

人間とAIが相互に前提化され、新たな知的生態系が形成され共進化的な生態系へと移行する段階である。人間と生成AIが共創者となり、人間が意味を付与し生成AIが知的パートナー (Co-creator) として常に存在する。人間とAIの相互作用による創発が実現する。この段階においても、人間が主体性を持つことや結果の最終責任を負う必要があろう。

生成AIの進化・浸透は、今や「AIは人間の思考を奪うのか？」という問いを我々に迫るまでに至っている。私はこれについて、人間の知的主体性が重要であり、かつそれを持ち続けることが唯一の解ではないかと考える。今回はこれについて考えてみたい。

注1：意味はそのまま表現を若干修正している。

注2：「Mutually Exclusive and Collectively Exhaustive」（モシなく、ダブリなく）の頭文字を取った言葉。物事を論理的に整理・分析する際の基本となる枠組み。

さて、今回は何について書こうかなあ…とfacebookを覗いてみると、起業家・木下斉さんの「地方から女性が抜ける。男性も抜ける。そして今、自治体を動かす「担い手」そのものが消えています」という投稿が目にとまりました。

思い起こせば今から約20年前、市町村合併を経てここ有田川町が誕生した際、役場職員だった私は人事業務とともに行政改革も担当していました。当時、総務省は地方公共団体に対して、事務事業の見直しや定員管理・給与の適正化などを「集中改革プラン」としてまとめ、行革を強力に進めるよう求めていました。となると、人事を担当しているだけでも嫌われるのに、さらに庁内で逆風が吹くこととなります (泣)

今でも記憶しているのは、事務事業の洗い出しと評価を行う際、過疎地域に設けている出張所の運営業務を担当する課の方が、「事業目的」として「出張所の存続」と書いていたこと。「高齢化が進む交通不便地域での行政サービスの維持」みたいなことを期待していましたが、きっと担当の方は「コストカット」や「廃止」圧力がかかるものと身構えたんでしょね。しかし、当の私とはというと、事業廃止や人員削減より、同じお金をかけるならもっといい方法があるのでは？など、代替案によるコストや人員の有効活用に目が向いていました。木下さんも触れられていますが、マニュアルがあれば対応できる定型業務については、外部委託やアルバイト職員（今で言う会計年度任用職員もしくはAI）に任せるなどして、正職員は政策立案の側に回るべきで。また、「合併の効果」として職員数の削減が求められ、国では定年延長の議論も始まっていましたが、「大事なものは1人の年配職員より2人の若手」と考え、極端な採用者数削減をやめ、入庁後に学ぶ機会を提供するように努めました。

さて話は戻り、木下さんの投稿の最後は「あなたの地域は、次の世代の担い手に選ばれる職場になっていますか」と結ばれています。以前、「地域全体を一つの企業と仮定すれば、そこには人事部的存在が必要なのではないか。中間支援組織、弊社しろにし設立のきっかけはここにありますが」と書きました。「地方公務員試験の競争率低下が著しい」「離職率が上がっている」とのことですが、言ってしまうと、それはその地方自治体（役所）に魅力を感じないということ。それは、地域も同じです。「選ばれる地域」になるためには、儲かる地域に変えていくことも大前提として必要ですが、それだけでは足りません。そのあたりを次号で紹介できればと思います。

何故、若者は自治体に入らないのか？

- 処遇の問題
 - 年功給カーブの公務員給与
 - ある県では、建設業、銀行の大半と、民間の大半では、初任給で5万円の格差
 - (労働者) 社会の進歩に對しては地方公務員制度のあり方が変わる必要 総合労働問題(自治体) 労働政策研究
 - 年功的な賃金体系を若者が忌避
 - 職種による給与の違いがない
 - IT人材の確保に特に苦慮
 - 成長の問題
 - 「自分を育ててくれるところに行きたい」と皆が言う
 - 「自己成長を企業内で進めたい」
 - 転職に対する抵抗は少ない(むしろ、転職した先輩への憧れ)
 - 「楽しく働きたい」
 - 公務職場がそれを提供できていないか
 - 見せられているか
- 仕事の面白さ、やりがい、仕事を通じての成長
↑
提供できるような組織と
なっているか？

『相模の国から ～大魔神のたび～』 エジプトへの旅 2025.12/19～28④ 茨城県境町 参与 溝口 久

旅の6日目、ついにハイライトであるギザの三大ピラミッドへ。ここで、三度目となる「世界一大きな絵」の展示が行われた。砂漠の上ではなくピラミッドを一望できるテラスに絵を掲げた。境町の橋本町長が挨拶の中で「子どもたちの交流を始めたい」と語った。町長は常に有言実行だからきっと何かが動き出すだろう。午前中は霞んでいたが、午後になると霧が晴れ渡りクフ王のピラミッドへ向かった。

BC2500年頃に築かれたこの「大ピラミッド」は、元来は146メートルの高さを誇る。平均2.5トンの石灰岩230万個を203段積み上げている。ただ石を積み重ねているから階段状になっていると思っていたが、完成時には化粧石に覆われ綺麗な四角錐だった。化粧石はナイル川対岸のトゥーラから運ばれた良質な石灰岩で、完成時には白く輝いていた。

ところが、イスラム時代にカイロの街をつくるために建材として剥がされてしまい、底部に一部が残るのみだ。また、頂部のピラミディオンも失われている。「大回廊」と呼ばれる高さ8.5メートルの壮麗な空間を抜け、腰を屈めて狭い通路を突き進む。辿り着いたのは、高温多湿な「王の玄室」だ。石灰岩の重圧を感じさせる静寂の中、驚異的な精度で設計された古代の換気技術に想いを馳せた。

その後、砂の中から掘り出されたスフィンクスの足元へ。全長73メートル、高さ20メートル。一枚の岩盤を彫り下げて造られたこの守護獣は、カフラー王の面影を持つとされる。かつては首まで砂に埋もれていたが、新王国時代のトトメス4世が夢で「砂を払えば王になれる」という神託を受け、発掘したという伝説が残る。足元から見上げるその姿は、数千年の歳月を静かに見守り続けてきた者だけが持つ、圧倒的な威厳に満ちていた。

夜の会食は、ピラミッドを独占するかのような絶景を誇る「クフレレストラン」。伝統を現代風に昇華させた「モダン・エジプシャン・キュージーヌ」は、スパイスの芳醇さと洗練された盛り付けが融合し、まさに贅の極みであった。

12月26日、旅は7日目を迎えた。カイロから南へ30km、古王国時代の巨大なネクロポリス（死者の街）であるサッカラへと向かう。目的は、紀元前2700年頃に建立されたジェセル王の階段ピラミッドだ。史上初の石造建築であり、後の滑らかな「真正ピラミッド」へと続く進化の系譜そのものである。

その後、2025年11月に全館グランドオープンを果たしたばかりの「大エジプト博物館（GEM）」を訪れた。この巨大プロジェクトは、建築・設計の面でも日本が深く関わっている。建物の基本設計はアイルランドのヘネガン・ペン・アーキテクトが手掛けたが、その後の実施設計や監理に日本の日本工営等が参画した。特筆すべきは、この博物館が日本とエジプトの深い信頼関係の象徴であることだ。

日本は国際協力機構（JICA）を通じて、総額約844億円にもものぼる円借款による資金協力を行った。これは単一の文化施設への支援としては世界最大級の規模であ

る。さらに、支援は資金面にとどまらない。日本は「GEM-CC（保存修復センター）」の設立・運営にも深く関わり、日本の専門家が和紙を用いた修復技術や、最新の分析手法を現地の修復官に伝承した。ツタンカーメンの遺物を含む膨大な文化財の診断・保存に、日本の「匠の精神」が息づいている。

エントランスで来訪者を迎えるのは、3200年前の巨大なラムセス2世像だ。そこから続く「大階段」の両脇には、エジプト全土から集められた歴代王の巨像や石碑が年代順に並び、上り詰めた先で窓越しに本物のピラミッドが姿を現す演出には息を呑む。さらに、ツタンカーメン王の副葬品約5,400点の一挙公開は白眉である。有名な黄金のマスクはもちろん、装飾が施された黄金の馬車、王が子供の頃に使用した椅子、さらには精緻な宝飾品に至るまで、最新の照明と展示技術によってその輝きが蘇っている。

別館には全長42メートルの「太陽の船」が移設展示されている。ここでも日本の高度な重量物搬送技術が活用されている。キャプションに並び日本語は、単なる翻訳ではなく、両国の専門家が汗を流して文化遺産を守り抜いた共同作業の証なのだ。

エジプト最終日。車で3時間をかけ、地中海に面した麗しき港町アレキサンドリアを目指した。紀元前331年、アレクサンドロス大王が自らの名を冠し、理想都市として設計したこの街は、かつて世界最高の知性と富が集まる場所であった。古代最大のアレキサンドリア図書館の精神を継ぐ現代の図書館を訪れ、カエサルやアントニウスと恋に落ちた最後の女王クレオパトラ7世の劇的な生涯に想いを馳せる。

彼女の死とともに3000年続いたファラオの時代は終焉し、エジプトはローマ帝国の直轄地となった。この地で開催された最後のエジプト巡回展に参加したのは、「エジプト日本スクール（EJS）」の子どもたちだ。日本の教育スタイル「特活動（TOKKATSU）」を取り入れ、現地で絶大な支持を得ている。彼らが描く絵の輝きは、この旅を締めくくるにふさわしい、次世代への希望に満ちていた。

全ての行程を終え、カイロ空港から成田への帰路につく。エジプト航空の機内はアルコール提供がないため、ビールとワインをしっかりと持ち込んだ。12月28日無事に帰国。

